吉田　今日は石井先生においでいただき、『教育実践の底流』といふ連載対談の最終回にしたいわけです。今までは実践家の方の登場が多かったわけですが、石井先生は必ずしもさうではなくて、学者であってしかも教育実践に熱意を持たれ、有名な「石井方式の漢字教育」といふやうなことをおやりになって居られます。さういふ実践への熱意を支へてきた基本に、一体どういふ発想がおありになるのかといふやうなことを、伺(うかが)ってみたいと思ひます。

最初に石井方式といふのが、今どういふふうに発展してゐるかといふ話をしていただいて、それからお考への方に移っていきたいと思ひます。

石井　さうですね、一番先に発表しましたのは、昭和 26 年全日本国語教育協議会の全国大会で、東京都八王子の指導主事をして居り、意見発表しました。その時には、私自身、実践してはゐなかったのです。自分の子供に対する実験とか、単なるひとつの思ひつきみたいなもので、かうやったらいいんぢゃないかといふやうな提案にしかすぎなかったわけです。

昭和 28 年に小学校の教師の資格をとりまして、28 年の 4 月から一年生を担任し、26 年に発表したことを、実際に実践に移していきました。それを 41 年まで続けたわけです。14 年間やりました。そして、その間一応やってきたものを、一冊の本にまとめました。それが『私の漢字教室』(黎明書房)といふ初めての著書なんですが、それが“石井方式”と呼ばれるやうになったものなんです。

私はよく言ふんですけれども、石井方式と呼ばれるのは、実は不満なんです。石井方式と呼ばれたことが非常に残念なのです。といふわけは、私の考へは、基本的には極めて常識的な誰(だれ)もが当然考へなければならないものであって、さういふ考へ方は外国では常識になってゐるんです。日本だけが国語教育で、ことに表記の問題では言はば常識はづれのことをやってゐるわけなんです。常識的なものの方が、やってみたら効果が上がった。これが昭和 28 年から 36 年に至るまでの私の実験で判(わか)ったものですから、それでそれを主張したわけです。ですから、石井方式ではなくて、これは常識中の常識なんです。

吉田　先生のお考へといふのは、漢字といふのをみんなが使ってゐるんだし、それを別にして教へ込むといふわけではなくて、目に触

れさせていくといふのは当り前のことではないか。平仮名(ひらがな)とか、片仮名(かたかな)とかいふ方が簡単なのではなくて、全体を模様(もやう)みたいに子供が見てゐるといふことが基礎にあって、始めてそれの理解も出て来るのではないかといふお考へですね。

石井　それはあとで結果としてさういふことが判(わか)って来たんですけれども、私は社会で使ってゐる表記といふものを教へるのが、それが当然の国語教育だといふ考へなんです。仮に漢字で書かれたものを学習するのが、子供たちにとって大変だとしても、それを覚えるのが国語教育だと思ふわけです。

例へば「学校」といふ言葉は社会では漢字で表記してゐるわけです。ところが、社会で使はない「がっこう」なんていふ表記を別に作るわけです。社会にない表記を別に作って教へる。それに慣れさせて、あとで本物を教へるから、本物がなかなか身につかない。これは当然のことなんですね。どんな習慣でも、習慣といふものは改めにくいものですから、本物を教へるべきである、これが私の主張の一番中心なんです。

最初、難しくても本物を教へるのが国語教育の立場であるといふことでやったところが、案に相違して漢字の方がやさしかったと、あとからさういふ発見があったわけです。私は最初から漢字の方がやさしいと思ってゐなかったんです。やはり一般に考へるやうに漢字の方が難しいだらう。しかし、難しくても本物から教へるべきだといふ考へでやったところが、子供たちは、今の子供は仮名はほとんど一年生に入って来るときに覚えるんです。ところが、仮名(かな)を全然習得してゐないやうな子供が、漢字と仮名といっしょに習ひますと、漢字の方を先に覚えてしまふわけです。それで、おや、これは漢字の方がやさしいのかなといふことで、その方の研究をだんだん深めていったわけなんです。